

Gianfranco Baldini and Adriano Pappalardo. 2009. "What Democratic Elections Are, and What They Are Not" Chap.1 in *Elections, Electoral Systems and Volatile Voters* (pp.3-15). Basingstoke, UK: Palgrave MacMillan

報告者：法学研究科 M2 宋財法^{ソングェヒョン}

はじめに

- 現在まで活発に行われてきた「制度とその帰結(比例性、政党システム等)」に関する研究が飽和状態(成熟)に ⇒ 新たな視座からのアプローチが必要
- 現在に至るまで解明されてきた内容(デュヴェルジェの法則など)がどこまで通用するのか ⇒ 妥当性の限界・範囲(ambit of validity)
- 第1部(第2～5章)：選挙制度の形態・機能の体系的な再整理
第2部(第6～10章)：デュヴェルジェ及びポスト・デュヴェルジェにおけるアジェンダ

概念的議論

- 2007年現在、民主的に選出された政府を有するのは121カ国(Freedom House)
- 本書においては民主主義の歴史が古い国、民主主義へ戻った国、第2次世界大戦後に民主化された国など、21カ国¹⁾を分析対象とする。
- なぜ21カ国? ⇒ 概念・理論・方法論的な議論が必要
 - ①選挙がありながら非民主的な国々の存在
 - ⇒公正かつ自由な選挙が不在：これを達成するためには市民の自由が確保されるべき例) 第一次世界大戦後、西欧の多くの国で民主化を制度化・達成(第一の波)。
しかし多くの国々で短命。
制度が整備されるだけでは足りない。(開放的な市民社会、公的規制に基づく市場経済、競争をき包括的な政治社会、司法の独立、法合理的な行政部門、軍の政治的統制などが必要)
 - ②習慣化の過程の必要性
 - 民主主義が最も望ましい政体であるという認識を大衆とエリートが共有する事。
 - ⇒選挙はあくまでも出発点であり、民主主義が根付くためには時間と様々な要因が必要
- 民主主義の定着はどう図るか
 - ⇒ハンチントンの two-turnover test : 二回の政権交代があれば民主主義が定着。
しかし、アジアで限定してみるとインドのみ

1)オーストラリア、オーストリア、ベルギー、カナダ、デンマーク、フィンランド、フランス、ドイツ、アイルランド、イタリア、日本、オランダ、ニュージーランド、ノルウェー、スウェーデン、イギリス、アメリカ、ギリシャ、ポルトガル、スペイン

□現在まで紹介されてきた概念、理論、方法論を用いて選挙や選挙制度と民主主義の関係を説明するには限界がある。

貧困国における参加と競争

□第三の波により、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの諸国において民主化
⇒しかし、多くの国では民主主義が不安定

□なぜ？ 1) 政治参加の低さ(低い識字率、インフラ不完備、低所得など)

→自発・非自発的な政治参加への妨害、政治的動員の困難

2) 低開発地域の住民は排他的な利益・動機を有する

→ 政党の破片化(西欧の多党制とは機能的に異なる)

→ 一部の都市部を除いて競争の意味が希薄化

→ マジョリティーエスニック集団がヘゲモニーを掌握

→ エスニック間の緊張が増加

→ 民主主義の不安定

c.f.) とりわけ、エスニック集団が地理的に集中していると深刻化

例) 小選挙区相対多数制のインド：選挙区内では二大政党制、全国的には多党制(ENP=5.004²⁾)

□インドはデュヴェルジェの法則の一脱事例？

⇒妥当性の範囲を越えたと解釈するのが妥当

□どのような法則でも全ての母集団に対して意味を持つとは言えない。

しかし、分析において観測の数を分別なしに増やすのは不適切。(適切な分散が必要)

システムの定着

□1974年以降、経済・文化的な条件を満たしていた南ヨーロッパ、ラテンアメリカにおいて民主化が進行 ⇒ しかし、民主主義および政党システムが定着せず

□「定着」とは： 1) 大規模の大衆政党が組織され、かつ

2) 組織的に包括され、政党からの抽象的イメージの帰属意識を持つ有権者が備えられている状態

⇒中央ヨーロッパ諸国は「未成熟な民主主義」もしくは「部分的に定着」

ラテンアメリカの場合、「未組織的」、「流動的」と表現される

□民主主義の流動性(崩壊の可能性)は新しい民主主義の国家ほど高い。

²⁾ 2009年度下院選挙の結果

□ 上述の研究から得られる知見

- ⇒ 選挙制度が政党システムに影響を与えるためには競争的な民主主義のレジームが必要
- ⇒ 今までの理論が機能するためには民主主義の定着化が必要

□ したがって、本書においては大衆政党が機能し、「凍結された」政党システムを有する西欧 21 カ国のみを対象とする。

安定的民主主義国家における流動性の傾向

□ 民主主義が定着した国々において政党システムの構造化程度の低下が確認される。

- 理由： 1) 凍結された社会亀裂の解凍
 2) 既成政党の危機
 3) 新たな対抗勢力の出現など

- ・ 第三の波の影響を受けた国々においてはより深刻。

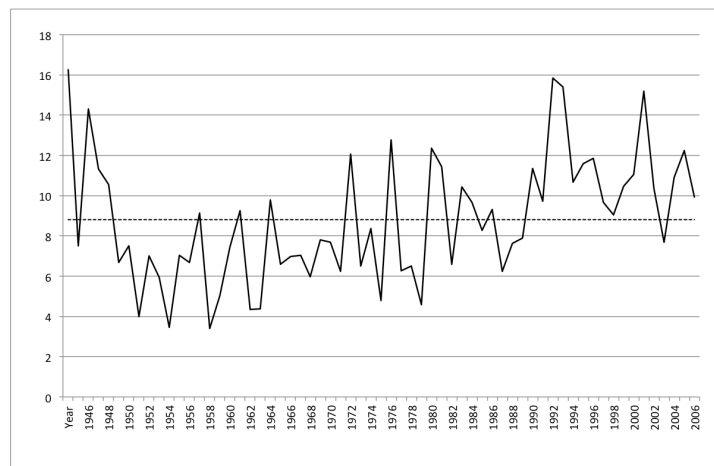


図 1. 民主主義の流動性の時系列的趨勢

(p.13 Table 1.1 から報告者作成)

□ 民主主義の流動性(volatility³⁾; 移ろいやすさ、不安定性) : ある選挙から次の選挙における政党間の活動(movement)

- ・ グラフの上下の変動が激しいことは安定的な時の選挙の次に行われる選挙において流動性が増加することを表す。
- ・ 最近の 20 年間に於いて流動性の増加が確認可能 (90 年代までは比較的指標が安定)

□ 選挙制度と流動性

- ・ 80 年代後半まで多数制の国家において指標が安定 ⇔ 比例代表制の国家ではやや増加
- ・ 90 年代から比例代表制の国家で最高値 / 増加幅は多数制の方が高

³⁾ $volatility = \frac{\sum |s_{it} - s_{it-1}|}{2}$: i 政党の t 期における得票率と t-1 期の得票率の差の絶対値の和を 2 で割った指標



図 2. 選挙制度と流動性の時系列的趨勢

(p.14 Table 1.3 により報告者作成)

- 選挙を単位とした図 2 とは別にレイプハルトの指標(詳細は第 8 章で議論)を基準に流動性を測定してもほぼ同様の結果
- 1990 年代から凍結されていた西欧諸国の有権者と政党システムは解凍し、「混乱(disalignment)」もしくは「再配置(realignment)」が進行
⇒第 8、9 章で「再配置」を議論
- 本書では制度の効果がどのような外生的要因によってどのように制約されどの程度のパフォーマンスを生み出すかを実証する。

コメント

- 1) 政治的文脈によって制度のパフォーマンスが異なりうるという事は去年の CSES の本の狙いと類似していると思うが、選挙制度と民主主義の関係に焦点を当てていることから、これからの分析が期待される。
- 2) 妥当性の限界・範囲(ambit of validity)を超えた国家を対象として「なぜ既存の理論が当てはまらないか」を解明する事も面白いと思う。
- 3) 著者は観測の数を増やす事に注意すべきであると述べている。確かに全ての観察対象に分散がないならケースを増やすのは意味がないかも知れない。しかし、分散があったらケースの数は多い方が良いのではないか。KKV のように「何となくケースを増やせ」とまでは言えないが、ケースを限定するのはあくまでもコストの問題であって、分析へ問題はないと思う。
- 4) 民主主義の流動性(図 1)を見ると流動性の変化は漸進的とは言えず、むしろ何らかのショックなどによって変化をもたらされたのではないかとと思われる。